

## 日本短角種の遺伝的能力の推移について

### 1. はじめに

家畜改良センターでは、肥育農家の同意が得られた枝肉情報等からなる和牛各品種のデータベースを管理・運営しており、日本短角種については、日本短角種枝肉情報全国データベース（以下、「短角DB」）を管理・運営しています。短角DBを構築するにあたり、肥育者情報、格付情報の調査・入力等については公益社団法人日本食肉格付協会が行い、肥育牛の子牛登記情報の入力等については一般社団法人日本短角種登録協会が行っています。

短角DBの目的の一つは、全国的な和牛の改良の動向を把握することであり、家畜改良センターでは、蓄積されたデータをもとに日本短角種の種雄牛及び繁殖雌牛の遺伝的能力（育種価）を評価し、育種価の生年別の平均により示した遺伝的能力の推移についての情報を提供しています。

### 2. 評価方法

#### (1) 評価に用いたデータ

今回の評価は、肉用牛改良増殖強化対策事業「優良種雄牛効率選抜・高度利用」で収集されたデータ（1989年1月～2009年12月と畜分）及び短角DBから収集されたデータ（2010年1月～2024年12月と畜分）を用いました。これらの事業で収集されたデータは、全国で肥育・と畜された牛の一部であり、全てのと畜された牛をカバーしているわけではありません。

・格付情報	23,215	件
・血縁情報	43,071	件

#### (2) 評価形質

評価した形質と観測値の平均等を表1に示しました。

表1. 各形質の観測値の平均及び標準偏差

形 質	データ数	平均 ±	標準 偏差	最小値	最大値
日齢枝肉重量(kg/day)	23,215	0.561 ±	0.081	0.300	0.885
枝肉重量(kg)		433.2 ±	57.6	280.0	674.0
ロース芯面積(cm <sup>2</sup> )		47.9 ±	6.4	30	83
バラの厚さ(cm)		6.91 ±	0.86	4.0	11.3
皮下脂肪厚(cm)		2.87 ±	0.98	0.2	7.0
歩留基準値		72.26 ±	1.32	67.1	78.1
BMS(No. )		2.12 ±	0.38	1	7
BCS(No. )		4.29 ±	0.71	2	7
しまり		2.07 ±	0.39	1	5
きめ		2.50 ±	0.53	1	5
(参考)と畜月齢		25.8 ±	4.1	16.0	37.0

※ 日齢枝肉重量 = 枝肉重量 ÷ と畜日齢

### (3) 遺伝的パラメーターの推定

遺伝的パラメーターは、以下の効果を考慮し、REML 法(単形質アニマルモデル)により推定しました(表2)。

母数効果: 性別、と畜年×と畜月、肥育者、月齢一次回帰(日齢枝肉重量は除く)、

月齢二次回帰(日齢枝肉重量は除く)

変量効果: 個体、残差

表2. 遺伝的パラメーターの推定値

形質名	遺伝率	遺伝分散 ( $\sigma_a^2$ )	表型分散 ( $\sigma_a^2 + \sigma_e^2$ )
日齢枝肉重量(kg/day)	0.50	0.0020	0.0039
枝肉重量(kg)	0.33	477.68	1463.62
ロース芯面積(cm <sup>2</sup> )	0.39	12.98	32.88
バラの厚さ(cm)	0.36	0.20	0.56
皮下脂肪厚(cm)	0.46	0.33	0.71
歩留基準値	0.52	0.71	1.37
BMS(No.)	0.22	0.03	0.13
BCS(No.)	0.26	0.09	0.35
しまり	0.40	0.06	0.14
きめ	0.18	0.04	0.20

※ 遺伝率 = 遺伝分散(遺伝子が原因のばらつき) ÷ 表型分散(全ばらつき)  
どのくらいの割合が遺伝的要因によるものかを示しています。

### (4) 育種価の算出

個体の育種価は、上記パラメーターを用いてBLUP法(単形質アニマルモデル)により算出し、2005年から2009年の間に生まれた繁殖雌牛(後代で枝肉成績を有するものが1頭以上存在する個体)の育種価の平均値を0(ゼロ: 遺伝ベース)として補正を行いました。なお、遺伝ベースは、過去15年前から20年前の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値とし、毎年変更しています。例として、ある個体の枝肉重量の育種価が+10kgであった場合、過去15年前から20年前の間に生まれた繁殖雌牛の平均的能力よりも遺伝的に10kg 優れていることを表しています。

種雄牛のうち、後代で枝肉成績を有するものが1頭以上存在する個体は863頭、繁殖雌牛のうち、後代で枝肉成績を有するものが1頭以上存在する個体は10,562頭でした。

## 3. 育種価の生年別平均の推移について

育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれ、本資料においては、枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する種雄牛及び繁殖雌牛の生年別の育種価平均により示しています(表3及び図1)。これは、改良の動向を示すだけでなく、種雄牛に求められる能力への時代のニーズも反映されています。また、種雄牛及び近年の雌牛におけるトレンドの変動は、頭数が少ないことも影響しています。

表3. 種雄牛及び繁殖雌牛の育種価の生年別平均

生年	頭数		日齢枝肉重量 (kg/day)		枝肉重量(kg)		ロース芯面積 (cm <sup>2</sup> )		バラの厚さ(cm)		皮下脂肪厚(cm)	
	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛
1991	33	343	-0.011	-0.018	-3.277	-6.901	-0.429	-0.616	-0.103	-0.067	0.071	-0.008
1992	31	271	-0.023	-0.015	-7.187	-5.621	0.362	-0.271	-0.064	-0.074	-0.060	-0.009
1993	14	232	-0.009	-0.020	-1.924	-6.700	-0.708	-0.188	-0.082	-0.104	-0.138	-0.028
1994	13	304	-0.014	-0.018	-4.473	-5.710	-0.745	-0.099	-0.054	-0.069	0.026	-0.014
1995	22	248	0.003	-0.013	2.099	-4.439	0.227	-0.123	-0.013	-0.071	0.073	0.008
1996	26	216	-0.017	-0.013	-5.728	-4.023	0.602	-0.315	0.006	-0.067	-0.005	-0.029
1997	25	263	-0.008	-0.012	-5.444	-4.050	0.297	-0.287	-0.021	-0.079	-0.018	0.002
1998	14	221	-0.012	-0.010	-4.959	-2.852	-0.160	0.337	0.013	-0.019	-0.003	-0.011
1999	23	233	0.018	-0.007	8.388	-1.637	0.535	0.292	0.038	-0.024	0.193	-0.003
2000	15	217	-0.005	-0.001	-2.920	0.423	-0.290	0.081	-0.071	0.030	-0.102	0.037
2001	16	204	-0.021	-0.001	-9.846	0.953	-1.023	0.628	-0.183	0.004	-0.132	0.013
2002	13	169	-0.014	-0.003	-7.899	-0.855	-0.554	0.283	-0.119	-0.054	-0.114	-0.004
2003	12	232	0.007	-0.003	5.836	-1.753	-0.153	-0.256	0.053	-0.030	0.064	0.025
2004	11	219	0.011	-0.004	7.342	-1.044	1.039	-0.140	0.168	-0.041	0.405	-0.022
2005	12	216	0.004	-0.003	2.619	-1.915	2.102	0.082	0.179	-0.011	-0.038	-0.017
2006	20	247	0.012	0.000	7.535	0.094	0.736	0.140	-0.028	-0.004	-0.043	-0.019
2007	18	266	-0.005	-0.004	-5.643	-2.739	0.120	-0.277	-0.099	-0.044	-0.178	-0.029
2008	19	251	-0.004	0.002	1.585	1.334	-0.626	0.082	0.080	0.025	0.124	0.019
2009	15	286	0.006	0.004	0.254	2.741	-1.416	0.002	0.030	0.030	0.235	0.039
2010	13	243	0.017	0.005	4.253	3.938	-0.268	0.095	0.112	0.041	0.121	0.047
2011	11	171	0.019	0.004	8.686	1.588	1.803	0.056	0.114	-0.011	-0.077	-0.037
2012	11	143	0.006	0.003	-1.543	1.109	2.138	0.086	0.140	0.045	-0.152	0.012
2013	16	109	0.009	0.007	-0.677	2.227	-1.135	0.055	-0.032	-0.002	0.068	0.009
2014	12	159	0.018	0.012	5.281	3.505	-0.466	-0.763	0.118	-0.002	0.202	0.114
2015	12	171	0.029	0.009	5.795	5.069	-2.439	0.072	-0.004	0.138	0.116	0.096
2016	12	171	0.022	0.013	2.313	6.153	-1.211	-0.047	-0.121	0.109	-0.163	0.076
2017	11	161	0.017	0.015	-5.524	4.762	2.348	0.102	-0.004	0.074	-0.330	0.050
2018	11	126	0.013	0.010	-7.078	1.290	0.104	-0.277	-0.147	-0.022	-0.115	-0.031
2019	8	97	0.049	0.011	13.332	1.119	2.770	-0.406	0.345	-0.042	0.034	0.033

注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

例えば、2019年の種雄牛の日齢枝肉重量は0.049kg/dayと記載されていますが、2019年生まれの平均的な種雄牛は、過去15年前から20年前の間に生まれた繁殖雌牛の平均的能力よりも、遺伝的に0.049kg/day優れていることを表しています。

4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(表3. 続き)

生年	歩留基準値		BMS(No.)		BCS(No.)		しまり		きめ	
	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛	種雄牛	繁殖雌牛
1991	-0.145	-0.018	-0.079	-0.065	0.025	0.075	-0.029	-0.032	-0.051	-0.056
1992	0.159	-0.001	-0.074	-0.061	0.067	0.086	-0.070	-0.036	-0.068	-0.068
1993	-0.004	0.033	-0.033	-0.068	0.123	0.096	-0.001	-0.053	-0.056	-0.070
1994	-0.096	0.041	-0.032	-0.060	0.107	0.082	-0.038	-0.041	-0.082	-0.061
1995	-0.062	-0.012	-0.032	-0.053	0.041	0.059	-0.023	-0.024	-0.035	-0.050
1996	0.199	0.003	-0.042	-0.059	0.079	0.084	-0.009	-0.026	-0.048	-0.058
1997	0.130	-0.038	-0.012	-0.053	0.051	0.100	0.004	-0.016	-0.042	-0.058
1998	0.052	0.094	0.008	-0.045	0.056	0.064	-0.016	-0.020	-0.028	-0.055
1999	-0.211	0.051	-0.036	-0.039	0.065	0.073	-0.016	-0.021	-0.032	-0.062
2000	0.040	0.003	-0.005	-0.037	0.031	0.081	-0.020	-0.024	-0.021	-0.059
2001	-0.011	0.076	-0.037	-0.033	0.088	0.061	-0.009	-0.015	-0.083	-0.050
2002	0.046	0.017	0.002	-0.039	0.012	0.078	0.034	-0.031	-0.012	-0.036
2003	-0.111	-0.052	-0.006	-0.021	-0.015	0.044	-0.009	-0.016	0.045	-0.017
2004	-0.214	-0.019	0.038	-0.015	-0.138	0.034	0.021	-0.012	0.060	-0.033
2005	0.417	0.044	0.037	-0.010	-0.102	0.022	0.042	-0.005	0.091	-0.016
2006	0.012	0.034	0.045	-0.002	-0.099	0.015	0.027	0.001	0.063	-0.015
2007	0.192	-0.003	0.034	-0.002	-0.049	-0.008	0.012	0.005	0.023	0.000
2008	-0.156	-0.003	0.044	0.005	-0.028	-0.011	0.023	-0.003	0.037	0.009
2009	-0.375	-0.057	0.031	0.007	-0.061	-0.012	0.028	0.001	0.074	0.017
2010	-0.102	-0.055	0.082	0.012	-0.150	-0.020	0.035	0.006	0.131	0.019
2011	0.273	0.017	0.004	0.019	-0.026	-0.014	0.026	0.007	0.105	0.031
2012	0.553	0.035	0.112	0.022	-0.141	-0.024	0.013	0.008	0.073	0.029
2013	-0.227	-0.019	0.045	0.038	-0.073	-0.002	0.008	0.019	0.053	0.047
2014	-0.217	-0.256	0.137	0.035	-0.172	-0.051	0.050	0.012	0.129	0.059
2015	-0.523	-0.048	0.090	0.041	-0.088	-0.046	0.050	0.019	0.129	0.074
2016	-0.146	-0.085	0.055	0.028	-0.103	-0.042	0.076	0.020	0.107	0.068
2017	0.720	-0.046	0.074	0.047	-0.023	-0.066	0.041	0.025	0.077	0.069
2018	0.119	-0.049	0.033	0.037	-0.055	-0.062	0.021	0.014	0.016	0.064
2019	0.432	-0.123	0.137	0.058	-0.033	-0.057	0.081	0.032	0.099	0.077

注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

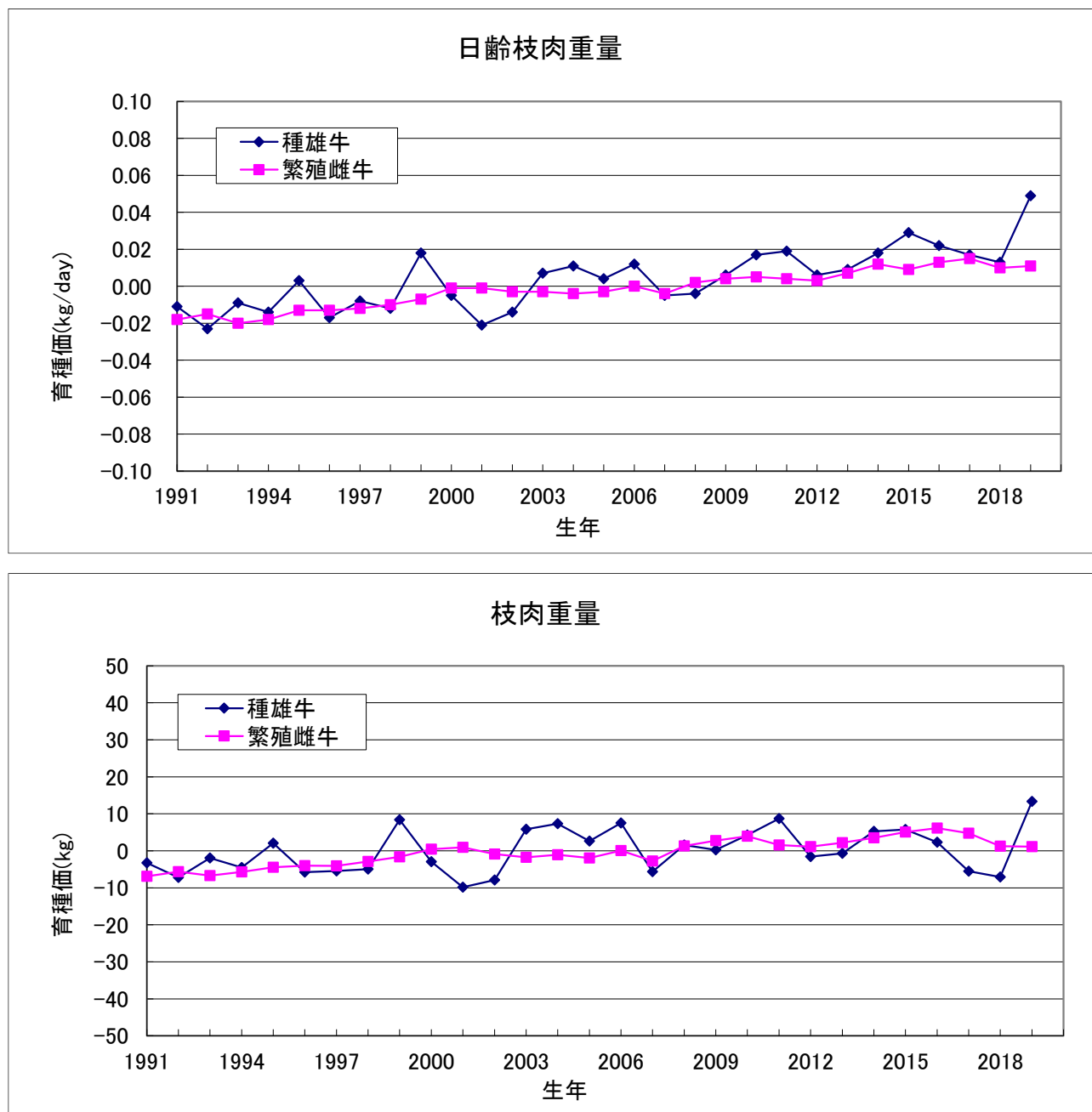
2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

図1. 種雄牛及び繁殖雌牛の育種価の生年別平均



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

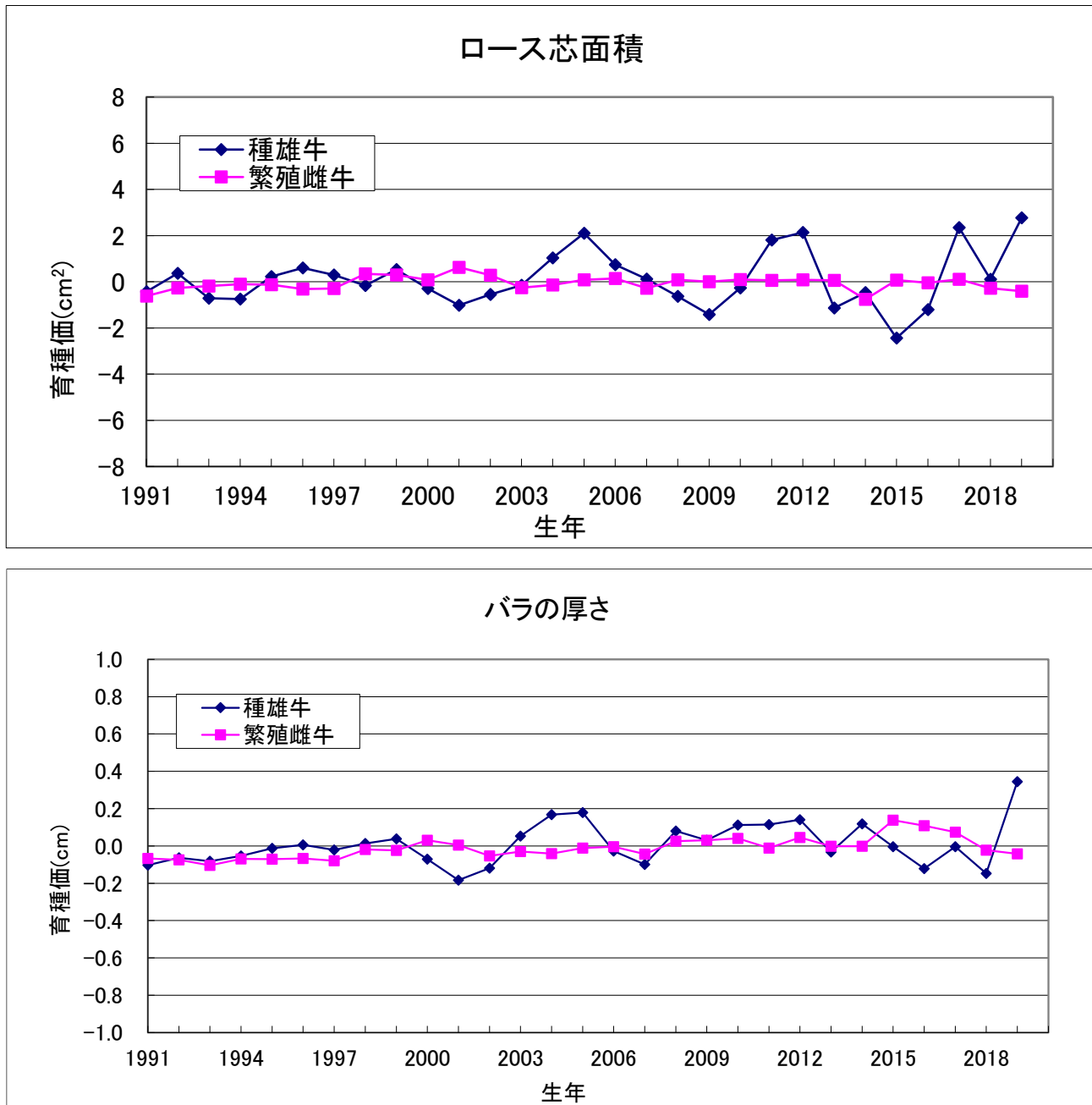
2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

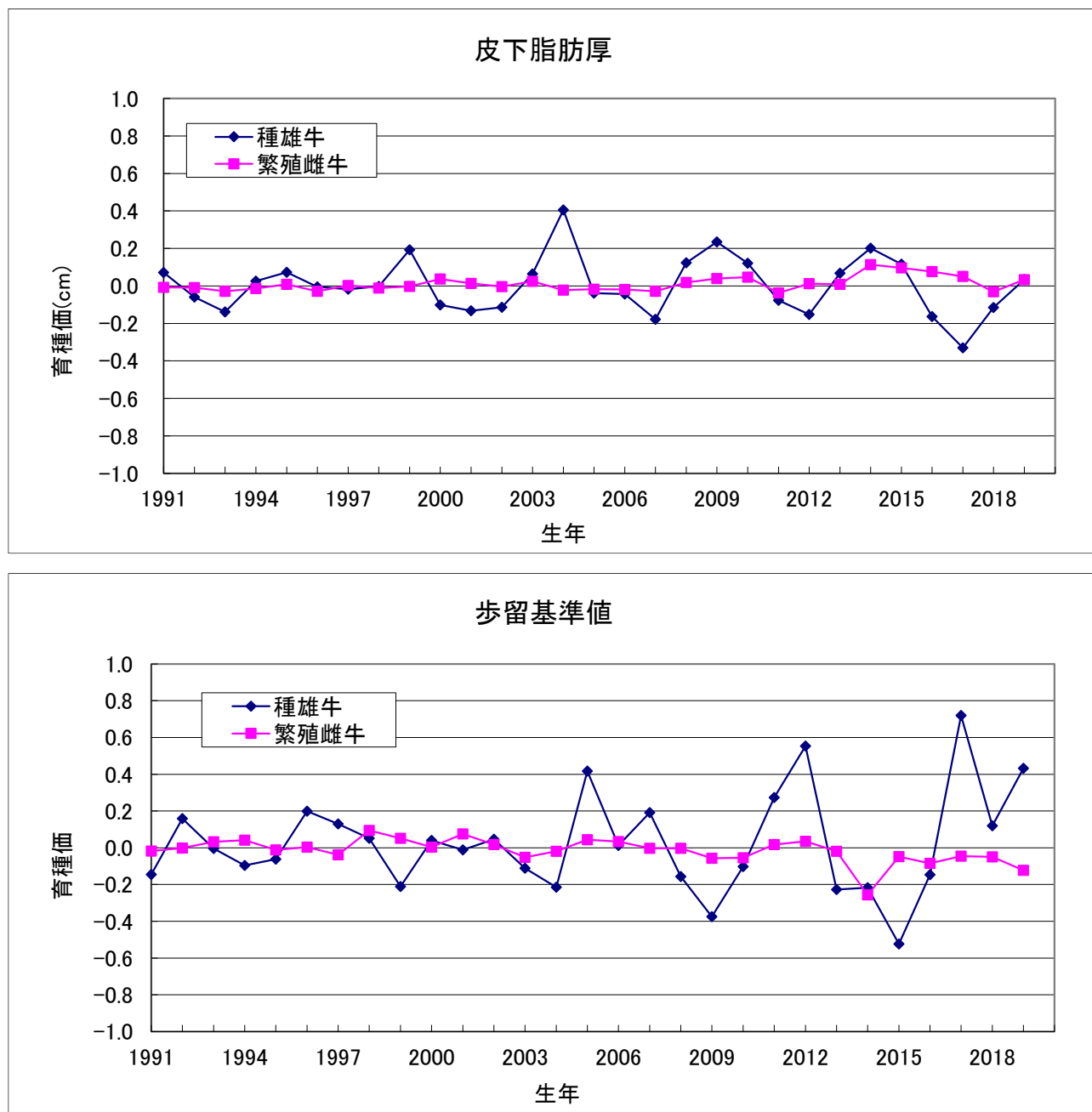
5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



- 注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。
- 2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。
- 3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。
- 4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。
- 5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

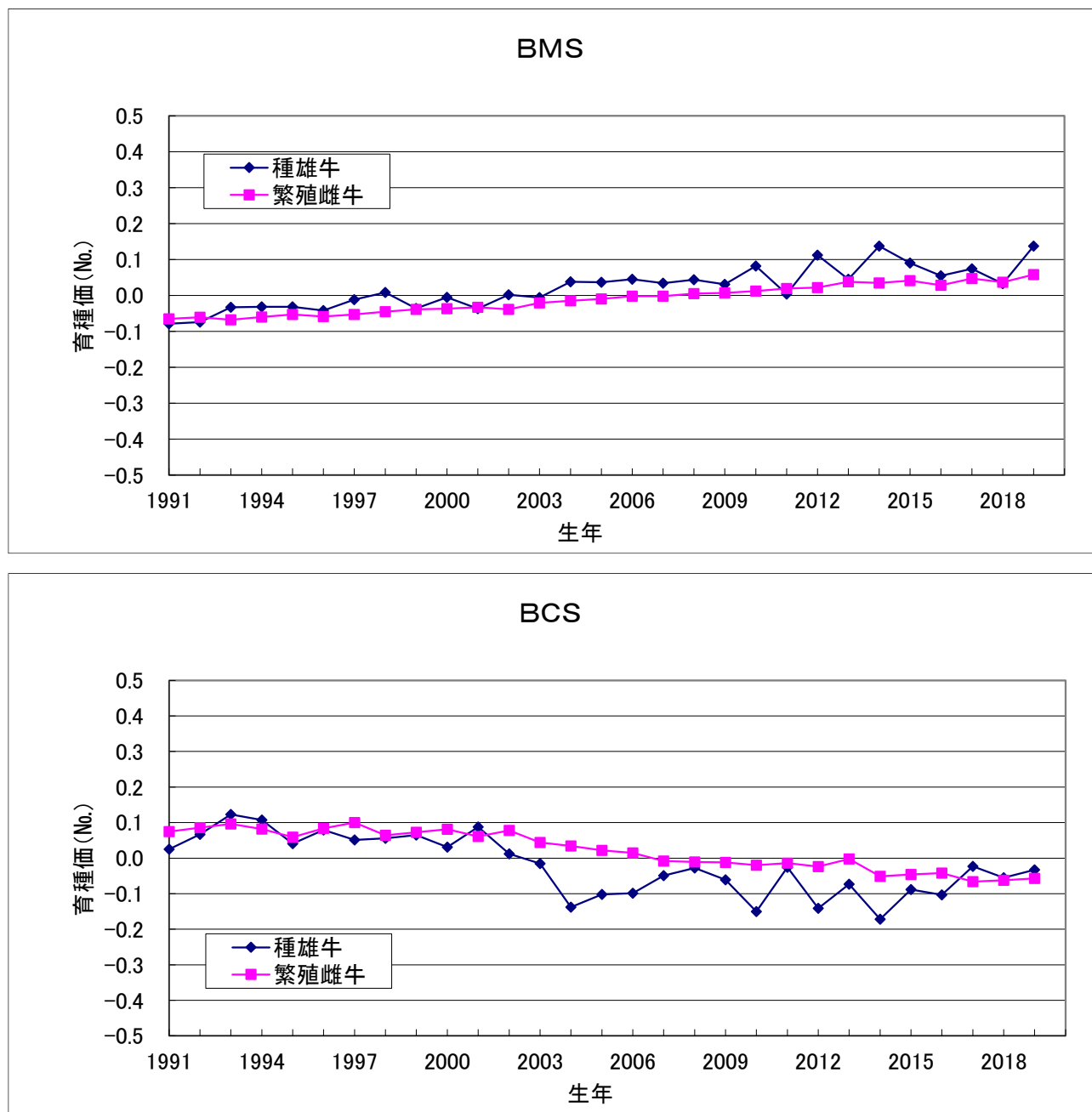
2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

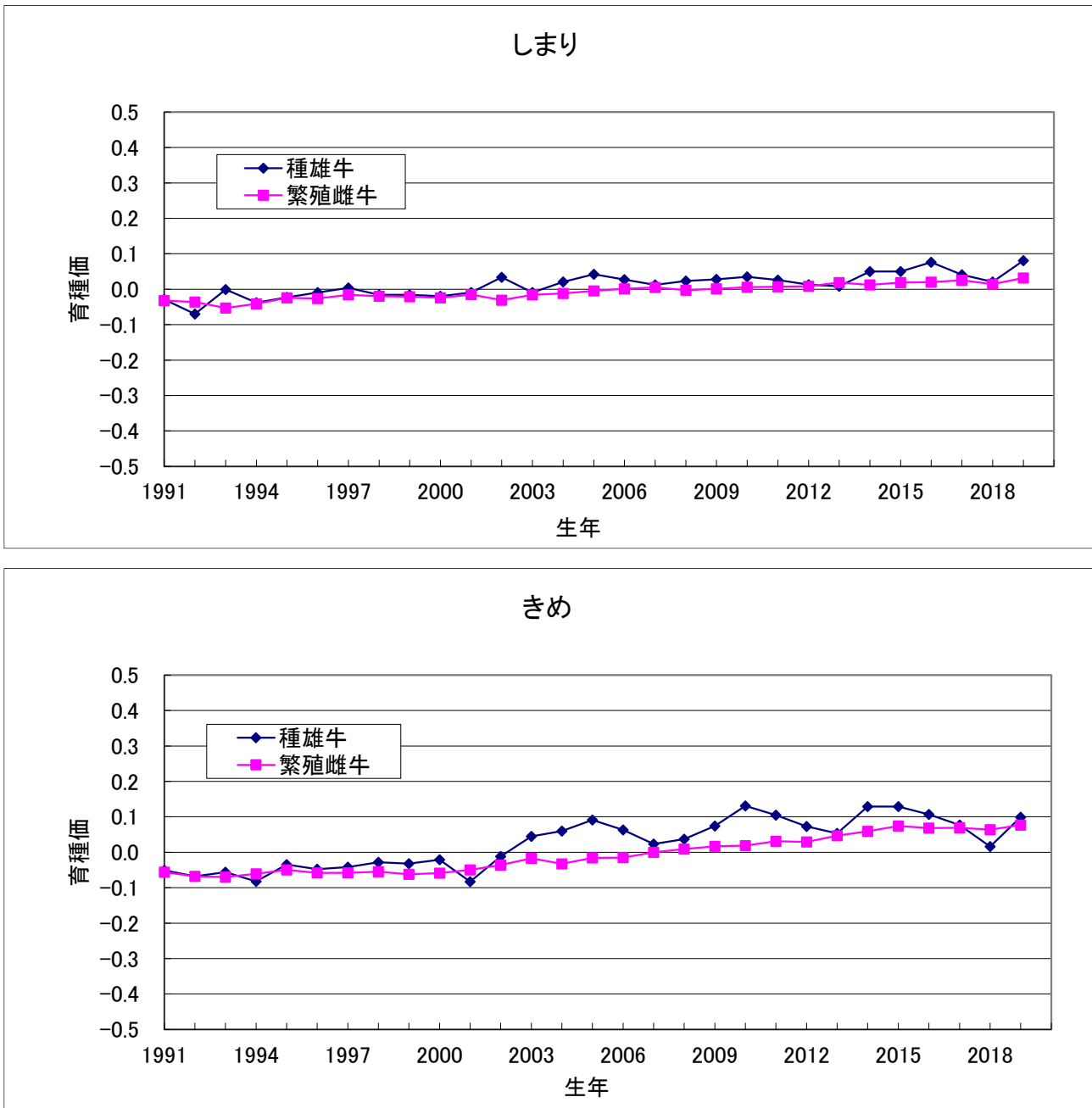
3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。



(図1. 続き)



注1) 育種価の生年別平均の推移は遺伝的トレンドとも呼ばれます。

2) 枝肉成績を有する後代が1頭以上存在する個体の育種価のみを平均の算出に用いています。

3) 育種価は過去15年から20年の間に生まれた繁殖雌牛の育種価の平均値を0として補正しています。

4) 種雄牛当たりの後代数等の違いにより、各個体の育種価の正確度にはばらつきがあるため、育種価の生年別平均値の正確性は生年により異なります。例えば、後代1頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は低く、後代100頭の成績に基づいて推定した育種価の正確度は比較的高くなります。正確度が低ければ、新たな後代成績を追加して再評価した際に、評価結果が変動する可能性が高くなり、正確度の低い種雄牛が多い年の育種価平均は、変動する可能性が高くなります。

5) 種雄牛及び近年の雌牛における遺伝的トレンドの変動は、平均算出に用いた種雄牛及び繁殖雌牛の頭数が少ないこと、加えて、それらの後代頭数が少ないことも影響しています。

## (参考情報) 遺伝相関について

遺伝相関とは2つの形質間の遺伝的な関連性がどの程度なのかを表します。具体的には-1~+1の範囲で示され、遺伝相関が1に近いほど2つの形質は遺伝的な関連性が強く、遺伝的に似た形質であるといえます。また、ある形質間の遺伝相関が高いと、一方の形質を改良することで、他方の形質も間接的に改良を行うことができます。育種改良に役立てていただくために、参考情報として今年度から遺伝相関等に関する情報提供を開始しました。

ただし、遺伝相関は全体としての傾向ですので、個体として考えた場合は必ずしも当てはまるとは限りません。例えば、枝肉重量とバラの厚さは約0.5と比較的高い遺伝相関ですが、枝肉重量は大きいけれど、バラの厚さは大きくないという個体もいる可能性がありますので、ご注意ください。

なお、遺伝相関の推定には、遺伝率と同じ要因を考慮し、2022年12月までにと畜され、異常値等を除外したデータのみ利用し、2形質アニマルモデルの総当たりにより推定しました。推定結果を次ページの参考1及び2に示します。

このうち、BMSとしまりの85%程度が「2」であり、きめも「2」と「3」が98%以上を占めており、ばらつきが非常に小さくなっています。そのため、これら形質との遺伝相関等は灰色で表示しております。あくまでも参考としてご覧ください。

(参考1) 遺伝相関及び残差相関

形質名	枝肉重量	ロース芯面積	バラの厚さ	皮下脂肪厚	歩留基準値	BMS	BCS	しまり	きめ
枝肉重量	—	0.22	0.51	0.34	-0.21	0.11	-0.15	0.07	0.14
ロース芯面積	0.42	—	0.25	-0.26	0.74	0.13	0.01	-0.05	0.03
バラの厚さ	0.64	0.32	—	0.28	0.18	0.29	-0.29	0.24	0.27
皮下脂肪厚	0.52	0.17	0.39	—	-0.75	-0.08	0.01	0.01	-0.01
歩留基準値	-0.26	0.56	0.15	-0.63	—	0.20	-0.05	0.03	0.08
BMS	0.09	0.05	0.09	0.08	-0.02	—	-0.59	0.78	0.74
BCS	-0.06	-0.01	-0.07	-0.11	0.06	-0.05	—	-0.46	-0.65
しまり	0.02	-0.01	0.03	0.04	-0.04	0.21	-0.06	—	0.76
きめ	0.11	-0.01	0.12	0.11	-0.08	0.20	-0.21	0.08	—

※ 右上: 遺伝相関、左下: 残差相関

※ 日齢枝肉重量と枝肉重量の遺伝相関: 0.997、日齢枝肉重量と枝肉重量の残差相関: 0.985

※ 日齢枝肉重量は枝肉重量と同様の傾向を示したため省略

※ BMS、しまり及びきめのばらつきが非常に小さいため参考値として灰色で表示

(参考2) 遺伝共分散及び残差共分散

形質名	枝肉重量	ロース芯面積	バラの厚さ	皮下脂肪厚	歩留基準値	BMS	BCS	しまり	きめ
枝肉重量	—	16.071	4.449	3.831	-3.402	0.351	-0.959	0.327	0.527
ロース芯面積	65.216	—	0.389	-0.528	2.218	0.078	0.011	-0.041	0.018
バラの厚さ	13.813	0.863	—	0.068	0.062	0.021	-0.039	0.025	0.022
皮下脂肪厚	11.345	0.466	0.149	—	-0.339	-0.008	0.002	0.002	-0.001
歩留基準値	-7.597	2.029	0.076	-0.330	—	0.027	-0.013	0.006	0.012
BMS	1.011	0.066	0.017	0.016	-0.006	—	-0.031	0.035	0.025
BCS	-1.120	-0.013	-0.022	-0.034	0.025	-0.008	—	-0.037	-0.040
しまり	0.228	-0.018	0.005	0.008	-0.009	0.019	-0.009	—	0.040
きめ	1.581	-0.014	0.031	0.030	-0.026	0.025	-0.045	0.009	—

※ 右上: 遺伝共分散、左下: 残差共分散

※ 日齢枝肉重量と枝肉重量の遺伝共分散: 1.468、日齢枝肉重量と枝肉重量の残差共分散: 1.624

※ 日齢枝肉重量は枝肉重量と同様の傾向を示したため省略

※ BMS、しまり及びきめのばらつきが非常に小さいため参考値として灰色で表示